

# 日本漢方協会通信

27年8月

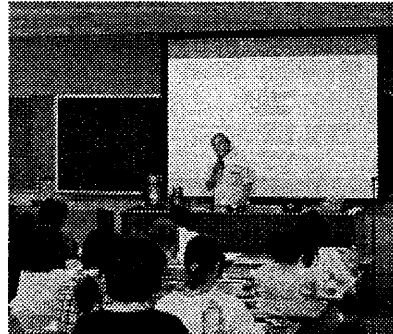
7月19日(日)慶應義塾大学薬学部・芝共立キャンパスに於いて、恒例の「薬局製剤実習講座」が実施されました。薬局業務に携わる方々を始め、薬学部学生の方など約100名という多数の皆様のご参加をいただきました。熱心に実習されている様子の一部をご紹介します。

<日本漢方協会ホームページより>

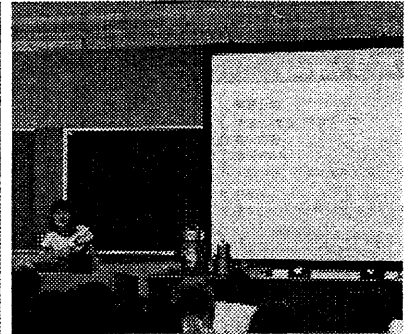
## 午前 <法令とオリエンテーション>



会長挨拶：今井会長(左)  
本物の漢方薬を製剤する価値、当実習の意義についてお話がありました。



法規編：三上副会長  
薬事法改め現在の薬機法に至る法令・公定書の変遷と、コンプライアンス上注意すべき点の講義です。



実習のポイント：八木学術委員  
失敗せず、ケガなく安全に良い薬をつくるコツや注意点についての具体的なアドバイスです。

午後は9つのプラッテ(実験台)に分かれて実習です。

各班リーダー、サブリーダーの指導監督のもと、楽しい雰囲気の中にも緊張感をもって、製剤実習を行いました。

## <丸剤：響声破笛丸>

原典に忠実に丸剤の剤形とすることで、水溶性および脂溶性成分、揮発性の成分も余すところなく製剤に含めることができます。また服用時の清涼感も丸剤ならではです。

そのような考えから、響声破笛丸「料」ではなく響声破笛「丸」の製剤の実際について学びました。



1) 生薬の確認検査  
漢方薬局製剤の品質検査は、原料生薬の入念な検査により補完されるものと考えられます。製剤用から取り分けた、確認用のサンプル生薬を用意して行いました。

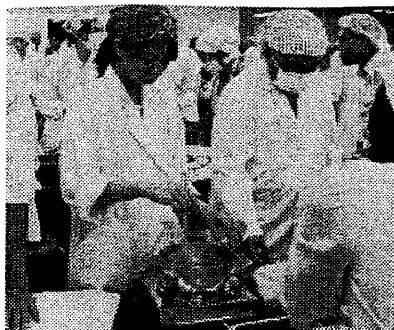


2) 秤量  
ハッカ、アセンヤク、レンギョウ、カシ(ミロバラ)など9味の生薬を秤量します。



3) 粉碎・篩過(しか)  
粉碎時の熱で生薬が変性しないよう慎重に行います。100メッシュの篩をほぼ全量通るまで粉碎と篩過を繰り返し、篩過後に秤量して収率を確認します。

2頁に続く→



4) 練蜜の調製

上記1)~3)の工程と並行して、局方規格ハチミツを、重量10%減となるまで弱火で煮詰めておきます。火が強いと変質（カラメル化）してしまうので注意。

煮詰めることで糖度と浸透圧が高まり防腐作用を発揮し、また粘性が高まることで賦形剤および徐放剤としての機能を果たします。

<軟膏：中黄膏>

華岡青洲の考案による、江戸期からわが国に伝わる処方です。

今回は、ウコン、オウバクとも粉末生薬を用意しました。

もし刻みの生薬を用いる場合は、上記同様の粉碎・篩過工程が必要となります。

響声破笛丸の製剤と並行して手際よく進めてまいります。



5) 混合

粉碎・篩過・秤量した混合生薬末へ、規定の重量%範囲内の練蜜を、熱いうちに混合します。具体的な量は温度・湿度等を考慮して微調整します。



6) 練合

清潔な手で60分間。力の要る工程ですので交代しながら行いました。「そば打ち」同様、最初はなかなかまとまらず苦労します。様子を見ながら、必要であれば練蜜を若干量増量します。

詳しくは協会のホームページをご覧ください  
昨年度の実習風景も掲載されています。



1) 基剤の調製

白局ゴマ油を秤量後、弱火で加熱し、残存する水分を除去します。油ですので火力が強いとすぐに温度が上がってしまいます。脂質の変性を抑えるため、100℃を超えないよう注意します。温度を保ちながら、秤量済のサラシミツロウを溶解します。



2) 濾過

清潔な濾過布を用いて、スピーディに行います。冷えるとミツロウの固化が始まり通りにくくなります。



3) 生薬末を加える

濾過済みの基剤へ、秤量済のウコン末およびオウバク末を加えます。どちらの生薬も黄色ですので、製剤は濃い黄色を呈します。



4) 混合

基剤中の生薬末は、微視的に見ると固体のまま分散しています（溶けてはいない）。沈澱を防ぎ、均質な軟膏を得るためによく混合します。冷えるとともに、次第に固くなってきます。



5) 混合・充填

ホイップしているように見えるかもしれませんが、逆です。空気を抜くように混合し、軟膏ケースへ充填します。充填時も気泡が入らないように注意。



6) 完成

ラベル、添付文書、製造記録書もすみやかに完備します。